

劉 連 仁

りゅううれん
(1913~2000)

貧しい農民だった劉連仁は、戦時中、中国山東省から強制連行され沼田町の鉱山で過酷な労働を強いられた。終戦直前に脱出し戦争が終わった事も知らずに、北海道の山中を彷徨した。1958年当別の山中で袴田清治さんに発見され奇跡の生還を果たした。13年の歳月が経っていた。無事祖国に帰った後、1991年、95年、98年と来日し、当別町民と親交を深めた。劉連仁が逝去した2年後「日中友好の扉を開き込め」当別町内外の草の根運動によって劉連仁記念碑が建立された(2002年)。その後、劉連仁記念碑を伝える会(大澤勉会長)が発足し、記念碑を守り、戦争を語り継ぎ、日中友好の活動を続けている。毎年全国各地から様々な団体、個人が記念碑を訪れ、伝える会と交流している。

と語った。当別町長代理で出席した本庄幸賢当別町教育長は、記念碑は町民の浄財で建立されたもので、町としても大切に

劉連仁生還60周年 記念集会IN当別



劉連仁が生還してから六〇年の歳月が経つ。この節目の年に六〇周年記念集会が八月三十日(日)劉連仁記念碑前で開かれ「旅スエラ」のツアー参加者や当別町民らが合流して近年にない規模の集会となった。

集会では、大澤勉会長(記念碑を伝える会)が劉連仁「発見」の経緯から記念碑建立などの歴史について説明し、劉連仁が北海道の山中で何度も自殺未遂したこと、死ねば家族も日本人も誰も何も知らずに埋もれることになるんだ、生き抜いてやると決意したという本人の証言を受け、「伝える会」は劉連仁の思いを次の世代へ語り継ぐ責任があ

ると語った。当別町長代理で出席した本庄幸賢当別町教育長は、記念碑は町民の浄財で建立されたもので、町としても大切に

劉連仁が生還してから六〇年の歳月が経つ。この節目の年に六〇周年記念集会が八月三十日(日)劉連仁記念碑前で開かれ「旅スエラ」のツアー参加者や当別町民らが合流して近年にない規模の集会となった。

その後参加者たちは、若葉町会館(隣りが劉連仁「発見」した故袴田清治宅である)に移動して交流を深めた。交流会では、児童文学 写生 きるりゆううれんじゅん物語を書いた森越賢子さん(函館市)が講演し執筆の背景などを語った。同書は読書感想コンクールの課題図書になり、寄せられた中学生の感想文などを披露した。その受けとめ方の鋭さ・確かさは、

ある希望を抱かせるものだった。地味で目立たない「伝える会」の持続的な活動が広がってきたすそ野は意外と広く確かなものだ、それなくして森越さんの作品も生まれなかったな、と感じさせた。

劉連仁は一九九六年、日本政府に謝罪と賠償を求めて提訴した。一審で勝訴するも最高裁で敗訴した。その裁判記録を劉連仁弁護団の弁護士事務所(東京)を訪れ閲覧していた時、一枚のカルテ「写」を見つけた。一九九八年高松市人民病院を受診した劉連仁のカルテである。それは衝撃であった。「深山恐怖に伴う四肢関節の疼痛、四〇年の下痢」とあって「こう書かれていた。念患者は長期にわたり、日本の北海道の無人の湿度の高い環境下に居住し、長期間飢餓状態にあった。夜間の夢が多く、悪夢を見る。山水樹林の環境に触れると恐怖を感じ、パニック症状を起す。多

くの治療方法を施すも効果なし。》この二年後に劉連仁は逝去する、八七歳である。つまり劉連仁は生涯にわたって戦争の悪夢にうなされていた。戦争の傷痕は、中国の田舎の貧しい農民だった劉連仁に取り付いて喰い込んでいた。アジア太平洋戦争で日本人は兵士も含めて三二〇万人が死んだとも、日本の侵略によってアジアで二〇〇〇〇万人以上が死んだとも教えられるが、あまりにも途方もない数で、我々は現実感を持って受けとめる事が出来ない。その思考停止の間隙をぬって「戦争の風化」が進むし、それを静かに狙っている人達もいる。そうした中で、劉連仁を生産悩ました深山恐怖症と悪夢に思いが行けば、我々は戦争のリアルへの糸口を掴む事が出来る。

劉連仁記念碑がもつ「磁場」とは、そのようなものである。(S)

当別短歌会詠草

八月

給手紙にアジサイの花涼しげに及よりエール暑さに勝てと
雲流る低きは東に走り去り高きは西にゆうつゆつ渡る
浜益の白く泡立つ海原に海風渡る舟一艘ゆけり
明けてゆく濃き蒼いろに空は澄み不致の三日月光り止まざる
夜の更けて月下美人の三つ開く観客はただ言ひとりのみ
インゲンをくるみみただく新聞にオウムア人死刑の活字

当別短歌



風街カフェ
親子三代展で少しシニールで面白い。人通りのない中、白樺町の方へ車を走らせる。エニアパー

当別駅前ふれあい倉庫に行くと、採りたての野菜を求めて賑わっていた。多目的ホールで、小竹順子さんの「親子三代展」が開催中だった



小竹美月「狩りする狐」

親子展と風街カフェと

親子三代展で「狩りする狐」は少しシニールで面白い。人通りのない中、白樺町の方へ車を走らせる。エニアパー

を改造し、カフエ」が当別は年街で、その四季を生きるとも、しネスミンダ、今のところ、日だけの鳥Kで古民衆、いう番組が、それを思ひ、内装。さつて気持ちには、様々、由に描かれ、「フロア」と云うところ、訪れた客が、ボクも一鷹だ。「今日、セラシキ」だ。「コリン」でも食べら、い南瓜?」スが効いた、詰めたもの、豊富に。野、地元のもの、味で身体に、ドリンクと、が付いて分、ち。お盆休、喧騒を他所、気配さえ感、静かな静か、を過す。

「当別新聞以後〜状況から・状況へ」
企画室
〒001-0021
札幌市北区北21条
西8丁目2-20-1
604 清水方
☎0115770161
編集人
清水 三喜雄
.....
ブログアドレス
smikio1948.org/mikio/
メールアドレス
9891_oltg@jcom.zaq.ne.jp

(2面からつづく)
原の小説のテーマは、子供時代の回想、妻貞恵との死別、被爆体験に大別される。ノンフィクション作家である梯久美子は、この三つのテーマに沿ってしっかりと多くの資料を検証しつつ、原氏書の生涯の全体をよく描いている。文学研究者や文学評論家と違って、文学に肩入れし過ぎずバランス良く、しかしある切実さ・共感も込めて描いているところが本書の特徴である。

妻貞恵を描く原の小説は散文詩のように美しい。よくこのような女性が原の伴侶となったな、と妙な感心をしたりもする。その最愛の妻が一九四四年九月病死する、享年三十三歳だった。原はこう書いている「もし妻と死別したら、一年間だけ生き残らう、悲しい一冊の詩集を書き残すために」。心慮そうだろうなと我々を深く納得させる。もし原爆を被災することなくあの夏が過ぎ去れば、一九四五年九月こそが妻と死別して生き残るべき月日の最後の区切りだった。運命は計り知れない。その年の一月まで千葉にいた原は、兄らの伝手を頼って広島に移り住む。《まるで広

島の惨劇に遭ふために移ったようなものだった。》そして被爆。その惨劇、地獄絵のなかを彷徨する。原は、この被爆の体験の全体を人間としてよくなつたために生き延びようと決意する。《愚劣なものに対する、やりきれない憤り》とともに、その勇猛心はどこから来たのかと云えば、まさに役立たずの無力な「文学」の力からだったとしか云えない。

原自身の言葉で「《原子爆弾の惨劇のなかに生き残った私は、その時から私も、私に激しく弾き出された。この眼で見た生々しい光景こそは死んでも描きとめておきたかった。・・・たしかに私は死の叫喚と混乱のなかから、新しい人間への祈願に燃えた。薄弱な私の私が物凄い飢餓と窮乏に堪へ得たのも一つにはこのためであつたらう。だが、戦後の世潮殺戮は轟々とこの身に打寄せ、今にも私を粉碎しようとする。》しかし原はよく耐えた、そしてあの『夏の花』三部作など記念碑的な作品によって、原爆の人間の悲惨の全体を後世の我々に未来への「予感」として残し続けているのである。 (S)

アイヌ文化普及啓発セミナー開催 「恵庭のアイヌ文化」と「アイヌと縄文」がテーマ

二日(火)は「日本文化のなかの縄文。アイヌ文化論に新たな照射を当てた興味深い講座だった。

「知られざる恵庭のアイヌ文化」(カリンバコタンから本流の岩屋まで)の講師は、長町章弘さん

(財)アイヌ民族文化財団が主催する「アイヌ文化普及啓発セミナー」が七月前期・八月後期として一〇講座開かれた。「かでの2・7」(札幌市中央区)で開かれた八月二講座に出席した。二〇日(月)は「知られざる恵庭のアイヌ文化」、



長町章弘恵庭市学芸員

恵庭市郷土資料館埋蔵文化財担当主査である。恵庭といえばカリンバ遺跡から出土した縄文時代の圧倒的な漆遺物の「朱色」が鮮明である。日本全国で発掘された「漆」ものの遺物の半分は恵庭から出土している。「漆」の採れない恵庭で何故?長町さんは、漆遺物だけではなく須恵器や北海道古墳(和人の有力者の墓、そこから出土した刀や装身具など考古学的な見地から、九世紀ぐらいまでの恵庭は、日本海ルートと東北からの空洋ルートが交わる蝦夷地(北海道)の交易的中心地だったのではないかと推測している。恵庭にある七世紀頃の茂漁二号古墳(柏木東遺跡)から出土した「罨形の栗形を有する刀」には仰天したことがある。栗形というのは、刀の鞘口に近い位置に付けた孔のある出っ張り。下緒を通し、帯に深く差し込まな

いようにするもの、この罨形がなんと罨の形をしている。日本で他に出土の例はない。六月に恵庭で開かれたカリンバ講演会で大沼忠春さん(元北海道教育庁)は、『日本書紀』持統天皇一〇年の条を引用して、この罨を伊奈理武志(いなりむし)の墓であり、刀は持統天皇から下賜されたものだと自説を展開させた。話としては面白いが史料的な根拠は薄い(「いなりむし」とは如何にも虫好きを思わせるけれど)。

恵庭は、他にも考古学的な出土は豊富である。しかし、一三世紀頃からのアイヌ文化についてはあまり注目されていなかった。長町さんのこの日の講演は、そうしたイメージを覆すものだった。

恵庭駅と国道36号線の間、旧カリンバ川とトウイン川に挟まれた地域(今には住宅地が広がっているが)に、カリンバ遺跡1・2・3(史跡)・4が点在する。発掘すればもっと遺跡が出て来ると思われる。実はこの地域に、アイヌのコタン(村)が広がっていた。その規模は蝦夷地でも屈指のものだ。発掘で確認された子七跡(建物)だけで一九九所。

他に土坑墓(鉄鍋・首や耳飾り・漆器・白磁皿・刀子・木刀なども)、ア(高倉)跡、送り場跡(灰送りなど)、子熊を飼育する檻跡など。注目すべきはチャシ(岩)跡もあった。

ところが近世の古文書などでは、恵庭のアイヌコタンに関する記述はない。この頃までにはカリンバコタンは消滅していたのだろうか。松浦武四郎の記録に漁太や島松など恵庭の記事が出てくるのは一八四六年『再航蝦夷日誌』からである。

長町さんの講演で興味深かったのは、シラツチセ(岩屋)のことである。この地域は、太古の支笏湖大噴火や恵庭岳の度重なる爆発で堆積した燼灰岩が多い。岩山のような燼灰岩は剥離して丁度庇の様な窪みが出る。この窪みを利用してアイヌは木を組み小屋掛けした。これが「シラツチセ」である。支笏湖と漁川の間で五カ所のシラツチセが発見されている。何をしたかと云えば、そこに墾泊まりして熊狩りをした。そこにはヌササン(祭壇)もあり、簡素なクマ送りの儀式もしたようだ。蝦夷地の他の地域ではシラツチセは発見されていない。講演の最



瀬川拓郎札幌大学教授

二日(火)は、「日本文化のなかの縄文」、講師は瀬川拓郎さん(札幌大学教授)である。瀬川さんは「アイヌ学入門」(講談社現代新書)『アイヌの歴史―海と空のノマド』(講談社学芸文庫)などで従来の狩猟採取型アイヌのイメージを覆して交易の民「ノマド」としてのアイヌ像を考古学の立場からダイナミックに描きだして注目された研究者である。この日のテーマもすでに『アイヌと縄文』(ちくま新書)で考

察されている野心的な試みである。

我々は一般的に北海道の近世までの歴史区分として、旧石器時代から縄文時代へ、さらに統縄文からオホツク文化も重なる擦文時代を経てアイヌ文化(ニウタニ)時代へと続く」と承知しているが、その時代区分ごとに人種が入れ替わっていたわけではないから、アイヌは縄文人だったといつても間違いではないが、「アイヌと縄文」を突き詰めて考えたこと、研究されたことはなかった。

瀬川さんは、アイヌも本土人も琉球人も縄文人を共通の祖先とする日本列島人であるという立場から、日本文化のなかに縄文の習俗や世界観(それはアイヌ文化と共通する)をたどるといふ試みをしている。平地人であることを拒否して縄文の習俗を守り通したアイヌ文化の総体は、弥生文化を選択した日本人にとって「ありえなかつたかもしれないもうひとつの歴史」だったというのである。それを精神的視点からアローチサざるを得ないところが、考古学というモノに依拠する立場の研究者としては苦戦するところ

だ。

この日もスライドで日本列島の「縄文起源の世界観・他界観」を示す豊富な事例を提示した。農耕以前の海民、各風土記で描かれる「ワニ」「シャチ」「サメ」、山・川・海の捉え方にみる世界観、修験者の伝説や古代出雲大社の世界観、大山祇神社(今治市)や日言大社(滋賀)、沖ノ島などを通して縄文起源の世界観・他界観を瀬川さんはこう整理する「《海と山の神が往還する世界、つまり祖霊の世界である山と、生者の世界である海をつなぐ生と死の循環する世界であり、川は海に帰属し海から続く世界と認識されていた。これは、「川は海から陸へ上がって村の傍を通って山の奥に入り込んでいく生物」とするアイヌの観念と共通して、古代海民と同じ縄文の世界観だ」と指摘する。

縄文人は、山があり海があり、その間にカミナリ川があるというトポロジに対して、農耕民からは海が失われた「《海の神は失われ、海から続く世界である川は、海の神に帰属しない「無主地」となつて農耕民の世界に取り込まれる。》

縄文性をよ
産は、弥生
局は王権に
ぬ人々であ
の人々だつ
し王権は、
つ強い呪術
の力を王権
不可欠なも
取り入れた
國柄、土墾
だが、縄文
海と山のス
ク思想は、
という人為
は相容れな
思想だつた
瀬川さん
の最後に「
」
《水稲耕作
と山の「あ
ある不毛な
占めた。さ
は海と山の
クを分断し
日本列島南
いの世界を
彼等にとつ
の世界は、
き「無主地
ならなかつ
いを塗り潰
の境界を生
いく社会。
さを許さず
一を迫る社
は、他者を
としながら
ネットワー
してきたア
民、すなわ
思想を受け
との目に、
どのように
たのだろうか
(4面へ)

